

---

W&B

urufu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

W&a m p ; B

### 【Nコード】

N 5 9 4 9 G

### 【作者名】

u r u f u

### 【あらすじ】

小さく平和な村に起きた不可解な事件。その事件を幕開けにその村の悲惨な歴史が繰り返されようとしている。二人の少年はそれを防げるのか！

## 夜の訪問者

夜の帳が下り、月が昇ると、つい先程まで暖かかった部屋は急に冷え込んだ。

夕食のサラダに使う野菜を洗っていると、水がいつもより冷たく感じられ、部屋がだいぶ冷えていることに気がついた。

暖炉の前のテーブルに今夜の夕食を運び、暖炉に火を熾そうとした。しかし、なかなか火はつかず、結局二十分程格闘してやっと点いた。そして俺は今夜もまた一人きりの夕食を食べ始めた。

暖炉でパンを焼き、焼いて味付けした猪肉をのせてほうばると、熱々の猪肉の肉汁とパンのカリツと感がいいかんじに組み合わせりなんともいえぬうまさの口の中にひろがる。昼間の重労働の疲れがそのうまさに拍車をかけた。

サラダ、パン、猪肉という質素でとても豪華とはいえない夕食をおえ、皿を洗って拭き、片付けも終わると、再び暖炉の前に座った。時折、パチパチと音を立てて火が踊る。

静かな時間が続いた。

気がつけば先程までパチパチと威勢よくはねていた火花も元気がなくなり、部屋は薄暗くなっていた。いつの間にか眠っていたらしい、夕食を食べた後の記憶がない。

十月に入り、この冬に使う薪をそろそろ割ろうかと、こここの毎日バーモンと二人で薪割りに従事していたのがたまたまようだ。燻り始めた火を見つめながら、一人で暮らし始めてもうそろそろ一年経つか、といまさらになって思った。

去年の冬、今とちょうど同じころ母さんは病気で亡くなった。父親がいない分、誰よりも努力し、誰よりも俺のことを考えてくれた母さんはもう、この世にはいない。もちろん家事もすべて一人でこなさなければならなくなった。おれはほかの連中に比べれば家事の手伝いはよくしていたほうだと思う。しかし全て一人でやるとなる

と、そう上手くできない上に、予想以上につらいことが多く、この一年苦戦続きだった。その結果、暖炉の前で居眠りし、せつかく苦勞して熾した火を消しかけている。

無造作に近くにあった小さめの薪を放り込み、少し大きくなった火を見ていると眠気がまた襲ってきた。

まだ時間は早い、今日は疲れがたまっているので早く寝ることにした。ベッドにもぐりこむと案の上一瞬で眠りに落ちていった。

その夜、この小さな村は黒い霧につつまれた。

朝、いつもどおりの時間に起きた。見ると暖炉の火が消え、部屋は再び冷たくなっていた。凍えるように寒い、今から火を熾さなければならぬとなると、昨日のことを思い出し気がめげる。日が昇って暖かくなることを期待することにした。

まだ薄暗く寒い中、日課でもある水汲みをしに外へいくため上着を着る。

この村には井戸が一つしかない。それも村の中央にあるため、いくらか小さな村とはいえ村の端ですぐ後ろに山があるような俺の家からは少し時間がかかるのだ。

戸をあけ、外に出ると、

「.....」

一面が霧に覆われていた。しかも黒、黒い霧だ。

早く帰りたいがためか、自然にいつもより歩調が速くなる。

この村は標高が高く、しかも山に東西を挟まれているため、平地より霧は発生しやすいのだが、黒い霧だけは昔から不吉とされている。それは、黒い霧が出るとこの村の東側にある山、黒山に住むオカミが山から下りてきて村を襲い、家畜を皆殺しにし、人々をも虐殺するといわれているからだ。誰でも一度は聞いたことのある話で、今ではそんな話など誰も信じていないのだが、ついこの間起こったある事件を考えると、警戒せずにはいられない。

井戸に着くと、いつもどおり大勢の人がいた。大半は女の人だが、中には男の人や俺みたいな子供もいる。

「おはよう。今日も早いわね。」

「タグムさん、おはようございます。」

初めのころは少し哀れみの目を向けられていたときもあったが、今ではそのようなことは全くなくなっていった。

「こんな霧が出ると、心配になりますね。お子さんも、せつかくの冬休みなのに外で遊ばせられなくて大変でしょう。」

「そうなのよ。それにあんな事件があったばかりでしょう、もう心配で仕方がないわ。」

「そうですね。もうあれから三日経ちますが、まだ進展はないのですか。」

「そうね、私も気にしているのだけど、何も聞いてないわ。」

「そうですね、ではこれで失礼します。」

「それじゃ、また明日ね。」

「はい。」

比較的仲の良いおばさんと別れると、家路を急いだ。何を隠そう、その事件というのが本当に不可解なものだったからだ。

ちょうど三日前。日が沈む少し前だった。この村の東、黒山のほうから男の叫び声が聞こえてきたのだ。この村の男たちというのは、狩に行ったり、木を切ったり、たくましい者ばかりでも悲鳴を上げるような者はいなかったのだ。皆何事かと血相を変えて捜しに行った。そして見つかったのは、獣の鋭い牙で体を引き裂かれズタズタにされ、無残な姿になったグワンだった。かれは村一番の大男で、畑を襲い農作物を荒らしていたイノシシを退治したこともあり、村人からの信頼も厚い男だったのだ。その日は村人全員が彼のことを思い、嘆き悲しんだ。そして昨日、村の猟師たちが山を搜索したのだが、こんな平和な村の近辺に人を殺せるような凶暴な動物がいるはずもなく、手ぶらで帰ってきたのだ。

この村の人々には楽天家が多い傾向があり、気味悪く思っている

だけで心配している人はほとんどいないのだが、俺は心配で仕方がない。理由はきちんとある。

それは先月のことだった。村の西側にある白山でオオカミが走っているのを見たのだ。しかも、そのオオカミは普通ではなかった。馬のように大きく、そして純白に輝いていた。本当に雪のように真っ白だった。その白さは、いまだ太陽がさんと輝いているにもかかわらずあたりを夜に落としきれかねない勢いだった。

もちろん、このことは誰にも話していない。話したところで誰も信じてくれないのは目に見えているし、世話好きなおばさんたちが暴走し始め、それはもう大変なことになることも断言できる。

家の近くまで来ると、朝霧だったのが霧は晴れてきた。

角を曲がり、やっと家が視界に入ってきた。誰かが俺の家の前に立っている。後ろ姿からその人物がバーモンであることが判明した。バーモンは俺の幼馴染で父親と二人で暮らしている。父親が狩りに出ているから、きっと朝食を食べにきたのだろう。

「おーい！」

バーモンがこちらに気づいて手を振っている。

こちらも手を振り返す。

「おいおい、また来たのか。」

「いいだろ。俺の分もちゃんと持ってきてんだ。」

バーモンの持っている袋には朝食に必要な食料だけではなく、夕食の分まで二人分入っている。夕食もご馳走になる気がする。

「こりやまた、たくさん入ってるな。」

「俺はお前みたいに一人きりで暮らすことはできないんだ。少しぐらいいいだろ。」

何はともあれ二人とも家の中に入り、俺はバーモンの持ってきた食料を持ち調理場へ直行したのだが、バーモンは火のついていない暖炉の前で立ち止まって言った。

「ジェイン。これじゃあ寒くて凍えちまうぞ。お前は凍え死にたいのか。」

「そんなわけあるか。俺だって凍えそつだ。こつち手伝う気がないなら火を熾してくれ。」

「もちろんそうするさ。俺は寒いのは苦手なんだ。お前のように水に手を突っ込んで野菜を洗うぐらいなら、火を熾すほうがまだ。」

そう言つとバーモンは火を熾し始めた。カチカチという火打石の音が聞こえる。俺の家は、寝室とこの部屋の二部屋だけでそのほかに仕切りというものがなかったので、調理場からもバーモンのいる暖炉がよく見える。薪に火がつかず困っているかと思ひ手元から目を上げると、ちょうど火が点いたところだった。少しがっかりして作業に戻る。

部屋が暖まり始めたころ、朝食ができた。

「火つけるのあんなに上手かったつけ、お前。」

「上手いってほどのものでもないさ。普通だろ。」

「そうか・・・」

内心、少し傷ついた。

朝食を食べ終え、ふざけあつて遊んでいると、いつの間にか時は過ぎ、日が暮れて夜になった。

「そろそろ夕食でも作るか。」

「俺も手伝おうか。包丁ぐらい握れる。」

バーモンも手伝い、早く食事でありつけるかと思つたのだが、バーモンは本当に包丁を握れるだけで何の役にもたたず、かえって遅くなつてしまった。それでも親友と二人での夕食は楽しく、いつもより食べ物がおいしく感じられた。

泊まつていけばいいのに、バーモンは帰るといふので家まで送つていくことにした。

「じゃあな。また明日遊びに来いよ。」

「そうさせてもらうよ。」

バーモンが家へ入ると、俺は俺の家へ向かつて歩き出した。

家の前まで来て扉を開けようとしたとき、ある視線に気づいた。

何かに見つめられている。辺りを見回すが何もいない。もしかして

と思い、上を見上げると、かくしてそこにはあの純白のオオカミがいた。



司祭！？

オオカミと目が合った。その銀色の瞳には怒りこそなかったが強い苛立ちがあった。走って逃げようかと考えを巡らせたが、この体格差では一瞬でつかまるだろうと思ひ直す。逃げて殺されるよりも堂々と殺されるほうがましだ。

「何の用だ。用がないのなら帰れ。ここは俺の家だ。」

言葉は通じないと分かっていたが、気迫で押し通し、強く相手を睨む。

オオカミの目から苛立ちが消え、口がほころんだように見えた。

『なかなか度胸のあるやつだ。私は司祭に用があるのだ。司祭はお前か、少年。』

どこからか声が聞こえた。とつさに辺りを見回したが俺とオオカミ以外に生き物はおらず、気配もない。しばらく無言で睨んでいるとまたその声が聞こえた。

『少年、司祭はお前かと聞いているのだ。違うのか。』

オオカミは面白いものを見るような目で俺を見ている。オオカミがしゃべるなんて洒落にもならないが、直感でオオカミが言っていることを確信した。

「この村に司祭なんて役職も、そんな名前の奴もいない。何かの間違いだろ。さっさと山へ帰れ。」

こちらを馬鹿にしたようなオオカミの態度から、うまくやれば襲われることはないと分かる恐怖心が薄れてきた。話せるのなら睨むこともないし、穏便に帰ってもらうのが一番だ。そして今やっと気づいた。これは声ではなく頭の中に直接響いている。訳が分からないが、つまりまだまだ気は抜けないということだ。この状況からして何が起ころうともおかしくない。

オオカミが少し苛立ちげに言い返してきた。

『いないだと。冗談も程々にしろよ。司祭とは昔から我等と人間と

を繋いできた重要な存在だ。司祭の存在を消すとは我等との絆を消すということだぞ。少年、お前もこの家の人間なら分かっているはずだ。』

このオオカミは何を言っているのだろう。ますます訳が分からない。

司祭というのは人の名前ではないらしい。とはいってもこの村に村長以外に決まった役職はないし、昔司祭という役職があったなんて一度も聞いたことがない。だが本当にそんな役職があったなら一族で受け継いでいるはずだ。村長も力カ一族が受け継いでいる。

ここは下手に出てなるべく相手を刺激しないのが得策か。

「もし司祭が本当にいたとするとその存在を隠しているのかもしれない。そこで提案なのですが、司祭というのが一つの一族が受け継いでいるものなら名前を聞けばどこの家か分かるかもしれません。名字を教えていただけませんか？」

オオカミの動きが止まった。

『少年、まさか本当に知らないのか、司祭の存在を。』

「はい、先程も言いましたが俺は何も知りません。」

『なんとということだ。人間がここまで愚かだったとは、先祖も計り違えたな。』

オオカミは落胆したように肩を落しながら俺の隣へ降りて来て話し始めた。

『そのとおりだ。司祭というのはある一族が受け継いできた役職なのだ。彼らは我等のよき友であり、また、先程言ったとおり他の人間と我等を繋ぐ架け橋でもあった。他の人間は我等を恐れ、逃げばかりだったが彼らは我等の話を聞き受け止めてくれたのだ。その司祭がいらないとはなんと寂しいことか。ああ、その一族の名は《マークシー》といった。』

オオカミは哀愁漂わせながら背を向け月を見上げている。

「マークシー……。」

それは聞き違うはずもなく俺の姓名だった。

そして追い討ちをかけるように、オオカミはこんなことを言った。  
『それにその一族はこの家を代々受け継いできた。だからお前もその一族の者かと思っただけだが違ったか。私たちは長い時間山にこもりすぎたようだ。』

この家は俺の母さんが代々受け継いできた家……。ここまで来るとオオカミが嘘をついていない限り間違いないだろう。俺の母さんの一族は司祭を受け継ぐ家系だったのだ。そしていまやその一族で残っているのは俺一人、つまり俺が司祭ということだ。

俺は背を向け月を見上げているオオカミに向かって言った。

「俺の名前はジェイン・マークシー。マークシー家唯一の生き残りだ。お前の話が正しければ俺が司祭ということになる。」

オオカミは目を見開き振り返った。

『少年、その話は本当だろうな。俺を騙そうものならこの牙が黙っちゃいないぞ。』

夜の闇にオオカミの牙が光る。

「本当だ。俺は去年母からこの家を受け継いだ。それにお前に嘘をついて俺に何かいいことがあるのか。」

そう。去年母さんが亡くなったとき、最後に母さんはこんな言葉を残した。

【ジェイン、この家はもうあなたの家よ。最後にRight storm を忘れないで。】

その意味がやっと分かった。きっと母さんはこのことを知っていたに違いない。だが、Right storm とはいったいなんだろう。謎だ。

しばらく無言だったオオカミが話し始めた。

『そうか。そうだな。お前しかいないとなると仕方ない。明日また来る。』

そういつとオオカミ山のほうへ帰っていった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5949g/>

---

W&B

2011年1月25日15時31分発行